

特集 青山武雄

# 「年譜 青山武雄」の掲載に寄せて

姫野 順一



【特集 青山武雄】

## 「年譜 青山武雄」の掲載に寄せて

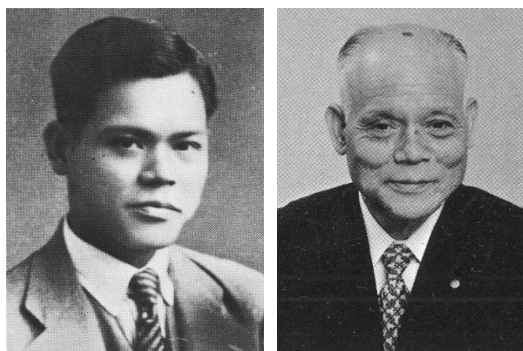
姫野 順一

### はじめに

『新長崎学研究センター紀要』創刊号の刊行に当たり、長崎外国語大学の創設者青山武雄先生の年譜を掲載することになりました。これは長男の愷<sup>やすし</sup>先生(元副理事長)が、長年にわたりまとめられたものです。今回青山先生の年譜を公表するにあたり、青山先生が残された資料の一端を紹介し、先生の活動の軌跡を振り返り、先生の思想の概略について紹介いたします。

### 1. 青山武雄先生のプロフィール

青山先生は昭和49(1974)年2月23日に亡くなれましたが、当時鎮西学院の鮫島盛隆院長は、月間『キリスト教学校教育』第173号の紙上で、青山先生の貢献を三つに集約されて紹介されておられます。第1に、その67年の生涯は、信仰の強さに支えられた「骨折りと悩み」のなかにあったということです。第2は、国際親善と



青年時代の青山武雄先生 晩年の青山武雄先生

海外発展、万人共愛の理想社会の実現を目指し、その具現として外語短大創設、長崎YMCAの復活、ロータリークラブの発足、ユネスコの運動推進に貢献したことです。そして第3は、同志社卒業以来神戸、松山、長崎と転じて、終始変わることなく伝道者として教会のために尽くしたということでした。

その概略は、死後の叙勲(正五位勲三等瑞宝章)の功績調書にも記されています。先生は、昭和20年12月1日に財団法人長崎YMCAを創設し常務理事、23年3月に馬町に長崎外国語学校を創設して校長となり、26年に短大に昇格して学長となりました。35年4月からは学校法人長崎学院の理事長として泉町に移転を果たし、大学の

経営の基礎を固められています。一方33年から亡くなるまで長崎YMCAの副理事長として活躍し、25年8月からは日本ユネスコ協会連盟理事、30年から36年の6ケ年は日本ユネスコ国内委員をつとめられています。また24年以降、長崎県地方労働委員会委員や公共職業安定委員会委員、長崎地方労働基準審議会会長を歴任されました。



校旗



校舎新築趣意書 1950年



YMCA理事会メンバー 1951年



長崎ユネスコ協長会長就任講演  
1957年4月

## 2. 青山武雄先生が残された史資料について

本学および青山家に残された青山先生の活動の歴史を語る史資料は、蔵書、論稿の草稿類、長崎外国語学校関係・YMCA/UNESCO関係・教会関係資料、身の周りの遺品からなります。そのうち蔵書については、先生が手許に置いた貴重な手垢本類は本学貴重資料室に保管され、一般蔵書は本学図書館に寄贈されて「青山武雄文庫」を形成しています。

手垢本類には、愛蔵の聖書、讃美歌集、同志社例規集が含まれ、同窓会名簿、執筆された著書、紀要、書簡、写真、アルバムが含まれています。なかには、明治5（1872）年にジェームス・カーティス・ヘボン（平文）が横浜で刊行した、日本最初の英語で書かれた日本語辞典（和英辞典）である『和英語林集成』の原本といった稀覯本もあります。また愛蔵書には、若き日に学んだ場所にちなんだ『靈南坂教会100年史』や『新島先生書簡集』とともに、先生の組織神学における指導教員であった大塚節治先生から贈呈された『基督教倫理学序説』（昭和10年「昭和九年二月十七日 鐵肩儷通義 大塚節治」の書き込みアリ）をはじめ、『基督教人間學』（昭和23年）、『神の算盤』（昭和40年）、同志社総長時代の『回顧七十七年』（昭和52年）といった大塚本が目につきます。これは青山先生が大塚先生を尊敬し、大塚先生も「青山学兄」として強い信頼関係を寄せていたことを示します。

青山先生の愛蔵書は、ほかにプロテスタント神学の蔵書と共に、日本YMCAの歴史書および日本の英学史・交渉史の本が目立ちます。これも青山先生の関心のありどころを示しています。プロテスタント神学への造詣と共に、長崎に淵源する英学史や東西交渉史への関心も青山先生の研究テーマでした。青山先生が、本学の図書館に寄贈した他の洋和の一般蔵書は「青山武雄文庫」となっています。その蔵書目録は、長崎外国語大学のマルチメディアライブラリーのホームページから検索・閲覧できます。

紀要類のなかには、青山武雄先生自身の論稿である「阿蘭陀通詞も研究」『長崎外語短大論叢』第11号1968年や、同「大隈重信と致遠館考（一）」（『同』第6号1963年）の抜き刷りとともに、先生が監修して刊行した『長崎における英語教育百年史』（英語教育発祥府約年記念事業委員会昭和34年）が目立ちます。またフルベッキを論じた尾形裕康「近代日本建設の父フルベッキ博士」『社会科学討究』（早稲田大学社会科学研究所 第7巻第1号 昭和36年）を収載する紀要も、先生のフルベッキへの関心の強さを示しています。昭和28年には長崎史談会にも加入していたようで、第36輯の『長崎談叢』には会費の催促状がはさまれています。『論叢』（長崎外国語短期大学 第17号 1974年）は「故青山武雄学長追悼記念号」でしたが、ここには先生の略年譜が収載されています。

自筆著書としては、牧師青山武雄著『基督教根本要義（求道者用）』（昭和10年7月20日、pp. 46手書き注付）が注目されます。これは先生のキリスト教信仰における中心的な思想を開示しています。残された草稿としては、「短期大学の諸問題」（原稿用紙8枚）、「委員会制度の是非」（原稿用紙3枚）、「アウグスチヌスの『神の国』」（同11枚、1954年）が含まれ、なかには同志社大学神学部3年生の最後に大塚先生に提出した卒業論文「共観福音書に於けるイエスの最高善観」（昭和4年、原稿用紙21ページ）が残されており、青山先生の思想の源流として注目されます。

書簡のなかには、政治家で戦後親和銀行の頭取を務めた北村徳太郎氏からの家族ぐるみの交友を示すものや、世界連邦建設同盟への講演を促す毛筆の手紙が残されています。先生が同志として尊敬した本学元理事長で元長崎大学学長の古屋野宏平先生からは、1963年8月10日付けの、毛筆で書かれた喜寿のお祝いのお礼の手紙が残されています。また大洋漁業の当時副社長であった中部悦良氏からの手紙は、追放特免についての挨拶状です。ほかに長崎軍政府教育課の松岡安立氏からは、進駐軍のデルノア司令官の夫人らの出迎えにYMCAから女子の7名が出迎える手配の依頼の手紙や、同軍政府民間報道課のペギイ・W・グリーン氏から夫人指導者講習会の礼状の手紙もあります。いずれも戦争直後の時代の痕跡を伝えています。

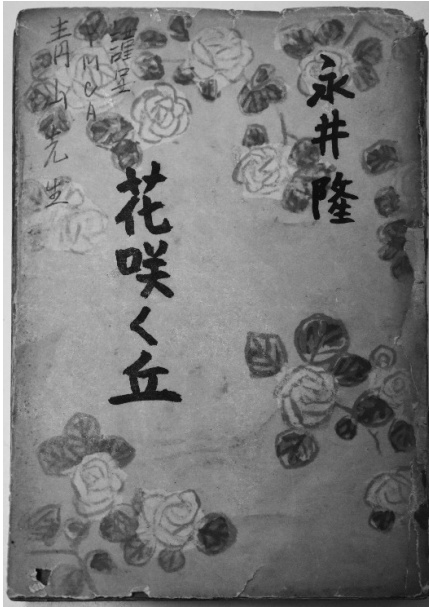
長崎の原爆で重傷を負いながら救護活動に身を捧げ、「長崎の鐘」などの著書で原爆被害と戦争の愚かさを訴えた長崎医科大学物理的療法科教授の永井隆博士は、原爆で生き残った同じクリスチャンの同世代人として、青山先生と深い友情で結ばれていました。下の写真は永井博士自身が撮影した長崎YMCA会館の献館式後の記念撮影で、青山夫妻と古屋野教授、ダーギン米国YMCA代表、ウィルソン長崎YMCAおよび長崎外国語学校英語教師が写されています。



前列左から青山夫妻、ダーギン代表、  
古屋野宏平（長崎医科大学学長）  
後は長崎YMCA教育部主事、J・ウィ  
ルソン（長崎YMCA及び長崎外国語学  
校初代アメリカ人教師）

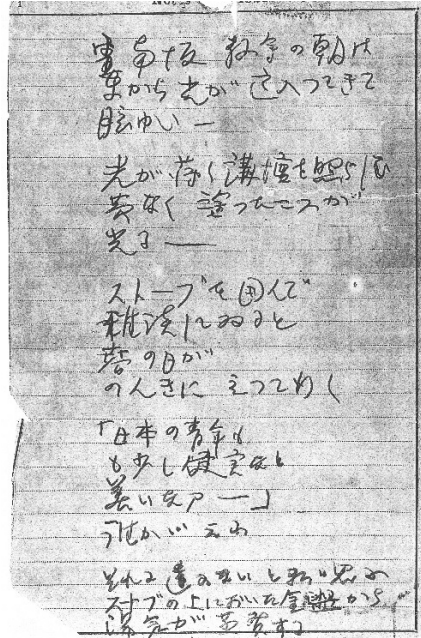
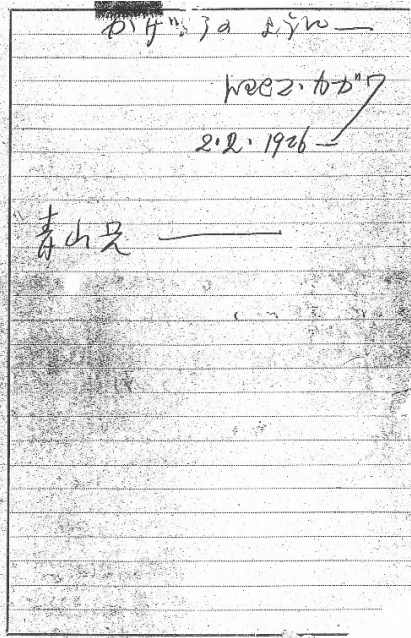
1948年12月15日 永井隆博士 撮影  
米国YMCA代表ダーギン氏を迎えてYMCA会館献館式記念

青山先生の蔵書には、永井博士から贈呈された献辞が添えられた著作『花咲く丘』  
(日比谷出版者昭和24年6月)と、『いとし子よ』(大日本雄辨會講談社昭和24年)の  
2冊が含まれています。



永井博士から青山先生へ贈呈された著書2冊

また青山愷先生がまとめられた青山武雄資料と題されたファイルには、霊南坂時代に講演に来た賀川豊彦から送られた即興の激励メモ「かげろうのように」が残されています。



かげろうのようにー トヨヒコ カガワ 2. 2. 1926

青山兄ー	ストーブを囲んで	それに違いないと私も思ふ
	雑談してゐると	ストーブの上においた金盃から
霊南坂教会の朝は	春の日は	湯気が蒸発する
東から光が這入ってきて	のんきに立って行く	
眩ゆいー		
	「日本の青年も	
光が薄く講壇を照らしむ	多少し健実だと	
黄なく塗ったニスが	美しいアー」	
光るー	誰かが云う	

戦後の古澤淑子独唱会（1953年）のパンフレットやエポックとなる写真など、短期大学およびYMCAの趣意書など多くの貴重資料も含まれています。ほかに遺品として愛用の眼鏡、煙草入れ、印鑑、パスポート、机、なども残されています。青山先生の資料は、長崎外国語大学の歴史を繙く第一級の資料となっています。



### 3. 青山武雄先生のキリスト教思想の発端と深化

青山先生は、1906年（明治39）6月7日、愛媛県越智郡今治町大字本町125番戸（現在の今治市本町）で青山政治、トラ夫妻の4男として誕生されました。

1922年（大正11・16歳）に今治市立青年学校を卒業した後、五十二銀行今治支店（現伊予銀行）に入学し、その年に日本組合基督教会今治教会の礼拝に出席して、翌年露無文治牧師により洗礼を受けています。そのころから英語の勉強を続けるとともに、信仰についての勉学の意欲が生まれ、1924年（大正13・18歳）4月に日本組合基督教会霊南坂教会が運営する霊南坂神学校に入学します。神学校では校長の小崎弘道牧師および小崎道雄牧師からキリスト教神学を学び、教会教職者の訓練をうけました。

このころアウグスチヌス（354～430年）の『神の国』や、チュービンゲン大学の留学から帰国したルター研究者・佐藤繁彦の刊行した月刊誌『ルッター研究』が青山先生の愛読書だったようです。長崎外国語短期大学長の時代に青山先生が回顧を記した草稿「アウグスチヌスの『神の国』」（1953年）には、弁証法感覚と共に、19歳のときの問題意識が振り返られています。

「私は十九のときある心境の変化ともうしませうか、キリスト教信者になりました。深い動機とてなかったけど、そのころ変わり易い若い私にもいろいろ人生問題の悩みがありましたので、求道をいたすようになりました。廿歳の時勉学のため上京しました。その頃の私の問題は信仰の確立と云うことでありました。信仰の独自性と申しますか、人間の感情や理知に動かれない信仰の独自なもの何か、その問題に心を用いておりました。」

このように哲学とは区別される信仰の独自性が青山青年の第一の問題意識でした。人生の悩みと信仰がどのように結びつくのか、これが若き青山先生が悩まれた第一のテーマでした。

この「信仰の一義性」という第一の問題に対する回答は、佐藤繁彦（日本におけるルッター研究の開拓者・九州学院講師のち日本ルーテル神学専門学校歴史神学教授）の影響でむさぼるように読んだ、ルターによる信仰と福音の本領の説明により与えられたと告白されておられます。若き日の青山先生におけるルターの影響には大きいものがあります。

先生が語るは第二の問題は、「純粹絶対的な信仰（宗教）」と「合理的な知識や学問（理性・哲学）」との調和にたいする疑問です。これに回答を与えたのがアウグスチヌスでした。アウグスチヌスの生涯の哲学と神学は、著作『神の国』のなかの深刻な「懺

悔録」ではなく「対話篇」のなかに表れている。これが青山先生の主張です。ここで青山先生は、このアウグスチヌスの伝記的叙述である「対話篇」に注目します。青山先生にとってアウグスチヌスの「対話篇」は「生きた生活史」でした。アウグスチヌスの青年期は奔放で、聖書を読んでも満足できずマニ教に九年間心酔し、またキリスト教の高僧に出会ってもこれに帰依できず、新アカデミア派の懐疑哲学に心酔し、プラトン哲学を読んでようやくキリスト教に入る経路を与えられ、悩み苦しみ、悶えたあと「神の支え」を受けるにいたります。37歳の時ヒッポルで司教の助手となり、司教となってその地に滞在し、76歳までこの地で神の働きを人としてその生涯を奉仕に捧げました。その間、59歳から73歳までの13年間で大著『神の国』を書きあげます。

青山青年は、このアウグスチヌスの『神の国』のなかに示された「思想と体験の蓄積」を「全生活哲学」と名付け、第二の問題である「宗教と哲学の調和」に対する回答とされています。すなわち青山青年は、アウグスチヌスがこの書の地上的都に「神の軽蔑と自己愛」を描き出し、天上的都（神の国）に「自己を軽蔑して神を愛する営み」を見る姿を描き出す、そのような見方の中に「全生活の哲学」を発見されています。前者では支配欲が、後者では兄弟愛が支配する。この自我への執着と神の愛との葛藤、戦いを潜り抜けるところに表れる、歴史的に具体的な「神の国」、これが青山青年によりアウグスチヌスから繙いたキリスト教の本領でした。ここには「全生活哲学」が「神の国」へと至るといふ弁証法的な理解が見受けられます。

青山青年は、霊南坂神学校閉校にともない、1926年（大正15・20歳）4月、同志社大学で総長・学長をしていた海老名弾正を慕い、同志社大学専門部（同志社専門学校）神学科に入学しています。ここでは青山青年はしばらく京都の海老名家に寄寓し、のち学寮で生活します。神学科では、富森京次、芦田慶治、大塚節治、ラーネッドなど全盛時の諸教授の講義に出席したほか、高坂正顕教授（京都大学）の授業にも参加しています。

青山青年が在学した1926年（大正15）4月から1929年（昭和4）3月まで、同志社は「同志社精神高揚の時代」（大塚）であり、「弁証法神学の影響が見え始めた」（同）時期でした。神学部を中心に内外で活発な説教講演が実施され、昭和4年には海老名弾正総長解任騒動が起きています。

このような慌ただしい同志社の動きの中で、昭和4年3月に卒業を迎えた神学部三年の青山青年は、指導教員の大塚節治教授に卒業論文「共観福音書に於けるイエスの最高善観」（手書き草稿）を提出しています。この内容は、若き青山青年のキリスト教理解を示すものでした。

この論文は、師の大塚先生が（共観福音書）におけるイエスの「最高善」を「愛」と

見たのに対して、これを「信仰」ではないかと反論する内容でした。師の大塚先生は、青山が愛を道徳原理の中に置き、信仰を最高善とする主張する論旨に一々コメントを書き加えています。「神ヲ信ズルトハ結局即チ愛スルトイウコトニ吸着セヌカ、信は単ナル認識ヤ恐怖ヤ夢致デハナイ、信賴ト追慕デアル、全ノ実験スル信仰ハソレデアル」と大塚先生がコメントする場合、青年青山が、信仰を愛と二項対立的（二元的）、非和解的に見るのに対して、師大塚先生は、相補的（弁証法的）にみているようです。青年青山が超越神への信仰愛を強調するのに対して、大塚先生は歴史的・人格的な過渡期を示し、「物ノ発生スル心理的返投ニ於ケル前後ト、物ヲ構成スル本質トヲ混合シテ居ル」と批判し、信仰の中身を問題とします。この時期は弁証法神学から影響を受けた師大塚先生の「キリスト教的倫理学」が生まれつつある時代でしたが、青年青山は、神意の絶対性、超越性、神の命令を最高善とし、「神が命じる故に人は或る意味で幸福でなくなるかも知れない」という主張となります。これに対して師の大塚の「コノ点は愚ノ首項也、神命ジ給ハバ殺人ヲモ姦淫モスルカ」という批判には鋭いものがあります。

このような二人の見解の違いは「神の国」の到来という終末思想の受け止め方にも反映されます。すなわち師大塚の「神の国」は、「いのち」であり、歴史的であるとともに超越的で、弁証法的です。青山青年は、信仰の中で実現する絶対的・普遍的な行為となります。青年青山は、この問題をまだ思索中として最終判断を保留しています。その後青山先生が大塚先生の弁証法的解決を受け入れたことは、先に見たアウグスチヌスの「対話篇」の重視からうかがえるところです。青山先生が考える「愛」は、大塚先生同様にエロスではなくアガペー（神の愛）でした。

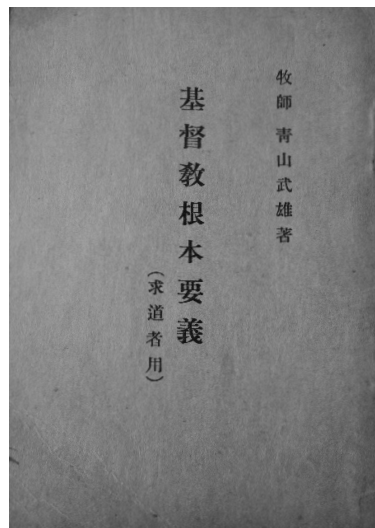
大塚先生の「キリスト教倫理学」の考えは、その後昭和9年に刊行された著書で全面的に成熟しています。第三篇は青山先生が卒論を提出したころ執筆されたようですが、その第5章「倫理学の中心原理と最高善の問題」の第三項、「道徳価値に於ける愛の優位と最高善の意味」のなかで次のように整理されています。「されば真の愛は唯、隣人愛として人間のみにも止まるを得ず必ず超人間的な価値の世界を前提とし、それへの憧憬を基礎とするものである」。ここに大塚先生の弁証法的な理解と、「信仰（宗教）の独自性」の見地を伺うことができます。青山先生はこの大塚先生の問題提起を深く心に刻んで、卒業し、信仰に沿って牧師の道を歩まれました。

同志社を卒業後、青山先生は今治に近い日本組合基督教会松山教会とその支教会である郡中教会に赴任しています。ここでは満州事件直前、キリスト教を規制するために愛媛県令が出した、「教会を神社、学校、病院の200メートル以内に設立することを禁じる」という規則を、教会側の代表として文部省に掛け合い、撤回させるという

活躍をしています。

1931年（昭和6）の4月、24才になった青山先生は、日本組合基督教会平野教会（神戸市）の主任伝道師となって赴任し、幼稚園の開設にかかわり、卒業から6年経った1935年（昭和10）7月20日に、この地で求道者用『基督教根本要義』（平野の光社）という小冊子を刊行しています。

先生が29歳の時の作品です。この小著は、卒論以後温めてきた青山先生の福音主義に立脚するキリスト教理解の到達を示しています。青山家の残された奥付がない『基督教根本要義』（手拓本）には、教師用の第2版改訂版の出版を意図していたと思われる手書きで注記や、文章の修正が加えられています。この手拓本における手書きの部分は、青山先生のキリスト教理解の発展を示す重要なカギを与えているように思われます。



牧師 青山武雄著  
基督教根本要義（求道者用）

まず初版と手拓本の両者に共通する目次の大項目と、そこに含まれるテーマを見てみましょう。

- 一、神：いかなる神を信すべきか：創造主・全能神・摂理・父なる神・罪・他宗教との違い・神を知る
- 二、イエス・キリスト：イエスキリストとは誰か、救い主・啓示・受肉・生涯・十字架・福音・甦り・キリストのみの信仰
- 三、精霊：真理の御霊・直観との違い・約束の御霊
- 四、罪：法律の罪との違い・罪への態度・罪の責任・自由意志・罪の結果
- 五、救い：功績や善行との違い・救済の方法・恩寵・悔い改め・信仰
- 六、神の国と永生：この世との違い・理想の社会か・いつどこで実現するか。死後の世界・死とは・靈魂の不滅
- 七、聖書：誰が書いたか・新約と旧約・根本は・聖書の種類・学ぶ順序・読む工夫と注意
- 八、祈祷：祈りとは何か・祈らなくても護られるか・祈祷の本義・何回・場所・形式
- 九、教会：協会とは何か・任務・加入は任意か・加入すると・聖日礼拝・洗礼・晚餐式

以上のタイトルと小見出しが、2つの『基督教根本要義』（1935）のなかで簡潔に解説・回答されている内容です。

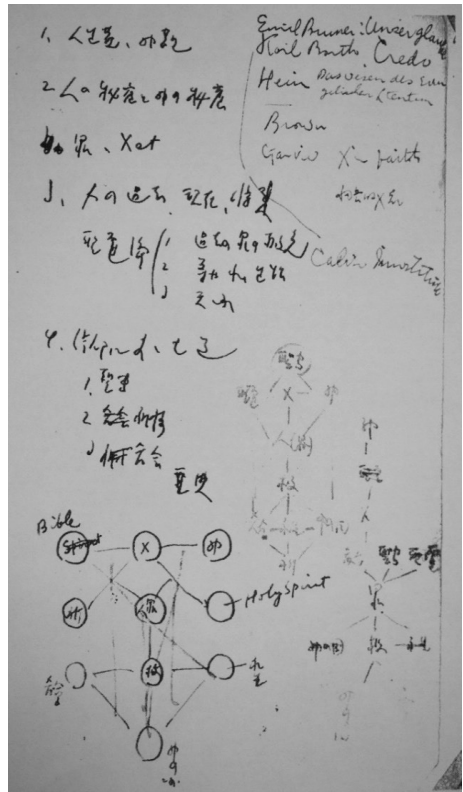
青山家に残された手拓本には、初版と同様に最初のページに「使徒信教」および「主の祈り」が付いているのですが、そこからあとの本編の各ページには欄外に注記が細かく記され、文章も頻繁に修正が加えられています。この青山先生の手書きの走り書きメモは、先生の「要義」の問題意識の深化を知る重要な手掛かりを与えてくれます。以下今回は、冒頭の見開きに書きこまれた、冒頭に記された本書の概要を描いたメモと図を読み解いておきたいと思います。

#### 4. 『基督教の根本要義』のテーマについて

メモの左上には以下のように記されています。

1. 人生観・神観
2. 人の秘密と神の秘密  
罪、Xst (キリスト)
3. 人の過去・現在・将来  
聖霊論 1, 過去の罪の赦免  
2, 勤勉生活  
3, 天国
4. 信仰に求む道
  1. 聖書
  2. 教会 祈祷
  3. 祈祷 教会  
聖霊

このページの右中央には、丸に囲まれて強調された「聖書」から、「神」と「聖霊」が線でつながり、「神」は「X」（キリスト）に繋がり、「聖霊」と「X（キリスト）」と「神」は「人（罪）」につながっています。「人（罪）」のもとに「救」があり、「救」は「神」と「聖霊」が降臨する「教会」と、「神」が媒介する「神の国」に挟まれ、「祈」に支えられた「永生」を実現するという鳥瞰になっています。ここでは、三位一体の上に「聖書」



『基督教根本要義（青山手拓本）』冒頭に記されたメモ

が置かれているのが特徴的です。

その右横および右下の図は、「神」—聖書—X（キリスト）」の縦の関係を説明し、その下に「聖霊」、「聖書」、「教会」の三つが「罪」に結び付けられ、「罪」はさらに下の「神の国」と、「救」と「永生」につながれています。その場合「永生」は横線で「永生」と消され、「救」の下に「永生」と「神の国」が付け加えられています。

また左下の図では、上段に最初「Spirit—X（キリスト—神）」という三位一体が記されていましたが、左の「Spirit（聖霊）」は「Bible（聖書）」に置き換わっています。そして中段には、「罪人」の左右に「祈」と「Holy Spirit」（聖霊）が配され、下段では「救」が左右の「教会」と「永生」と線につながれ、「罪人」の下に線につながる「救」は左右の「教会」と「永生」に線でつなげられ、「教会」と「永生」は下の「神の国」に線で組織的に結ばれています。

ここには先生の聖書を中心とする三位一体のプロテスタントとしての新解釈が示されているとみることができます。ここには、同志社で植え付けられた組織神学の発展がみられます。青山先生は、大塚先生の弁証法神学の衣鉢を継ぎ、青山先生が理解するキリスト教の根本要義が組織図としてここで整理されていることが分かります。

青山先生は、このような理解に至るための重要な人物および参考文献について右肩に細かく次のようにメモ書きしています。

「Emil Brunner : *Unser Glaube*

Karl Barth, *Credo*

Hein *Dasviren des Eiren*(?)

Brown,

Garvin *X'st faith*

福音的X者

Calvan, *Institutio*」

Emil Brunner : *Unser Glaube* は、エミール・ブルンナー（1889～1966）が1935年に出版した著書『私たちの信仰』のことです。彼はスイス出身のプロテスタント（改革派）神学者で、カール・バルト（1886～1968）と共に弁証法神学運動の草創期を担った新正統主義の代表的神学者として知られています。青山先生の蔵書にはブルンナーの翻訳本である『弁証法的神學序説』（後藤安雄訳 岩波書店 昭和10年）が含まれています。

Karl Barth, *Credo* は、バルトが同じく1935年に出版した著書『われ信ず』です。バルトは、20世紀のキリスト教神学に大きな影響を与えたスイスの神学者で、その

思想は弁証法神学や危機神学、新正統主義とされています。Heinのドイツ語文献は記されたドイツ語が読めません。Brownは、1935年に*The Church: Catholic and Protestant*, を出版したアメリカのプロテスタント神学者William Adams Brownと思われまます。

カルヴァンは、言うまでもなくプロテスタント改革派神学の創立者です。*Institutio* はラテン語で書かれ、5度に渡って改訂増補された彼の代表作で、日本では『キリスト教綱要』と訳され、プロテスタント神学の最初の組織神学の書とされています。

こうしてみると青山先生の『基督教根本要義』は、この本が書かれた同時代の昭和10(1935)年に出版されたブルンナーの*Credo*およびバルトの*Institutio*の弁証法的組織神学から強く影響されていることが分かります。青山先生は、昭和10年ごろのプロテスタント福音主義の欧米における先端の議論を吸収し、その基本的な教義を「求道者」のための簡潔なマニュアルに仕上げたと見てよいようです。

以上、青山先生の年譜の掲載に当たり、青山先生の初期のキリスト教思想について考察してみました。これ以後の青山先生は求道者として教会の宣教活動を続け、1938年(昭和13)6月に長崎の馬町教会に赴任します。それ以降、長崎で戦争と原爆を体験し、戦後は大塚門下の緒方純雄先生を長崎に迎えて二人で共働し、多くの賛同者を獲得しながら、長崎YMCAを再建し、長崎ユネスコの立ち上げ、長崎外国語学校の創設に取り組みました。長崎着任以後の詳しい活動は後掲の年譜を参照していただきたいと思います。戦争を体験して以後の先生の思想の発展については、稿を改めたいと思います。

## 参考文献

- 大塚節治『キリスト教倫理學序説』基督教思想叢書刊行会 昭和10年  
同『基督教人間学』全国書房 昭和23年  
同『回顧七十七年』同朋舎 1977年  
同『神の算盤』新教出版社 昭和40年  
青山武雄「共観福音書に於けるイエスの最高善観」同志社大学卒業論文 昭和4年  
同『基督教根本要義(求道者用)』平野の光社 昭和10年  
エミール・ブルネル・後藤安雄訳『弁証法的神學序説』岩波書店 昭和10年  
フェレー・緒方純雄『キリストとキリスト者』新教出版社 昭和36年  
大塚節治「大塚節治先生を語る」『基督教研究』・27巻2,3号 同志社大学神学部 1953年  
青山武雄「アウグステヌスの「神の国」未定稿 1954年  
青山武雄監修『長崎における英語教育百年史』英語教育発祥百年記念事業委員会 昭

和34年

青山武雄「大隈重信と致遠館考」(一)『論叢』第6号 長崎外国語短期大学 1963年

同「阿蘭陀通詞の研究」『論叢』第11号長崎外国語短期大学 1968年

故青山武雄学長追悼記念号『論叢』第17号 長崎外国語短期大学 1974年

飯清・府上征三『靈南坂教会100年史』靈南坂教会創立10年記念事業実行委員会  
1979年

鮫島盛隆「青山武雄兄を偲んで：人生の走場を走り終えた人」月間『キリスト教学校  
教育』第173号 昭和49年3月15日号

緒方純雄「真理と自由」『長崎外大論叢』第10号 特別寄稿 2006年

Brunner, Emil, *Unser Glaube. Eine christliche Unterweisung*. 1935 (Our faith, 1936)

John Calvin, *Institutio Christianae Religionis*, 1536.

Karl Barth, *Credo*, 1935